

〔研究ノート〕

清国在日留学生陳天華の ナショナリズムの形成

張 陽

This article is a note about the research of Chen Tianhua (陳天華) in few years ago. Chen was sponsored by Qing government to study in Japan in 1903. But he became a radical politician to against Qing government as soon as he arrived at Japan and wrote two pamphlets: *A Sudden Look Back* (猛回頭) and *An Alarm to Awaken the Age* (警世鐘) which were popular among the revolutionaries. During his last life in 1903–1905, we can see how fast the Han's student grow as a nationalist. Here are two points about Chen's research, one is his theory of anti-Qing government: after he failure the plan of an insurrection to against Qing, why he changed his mind to cooperate with government to against foreign imperialism. The other one is a dispute about his death: he suicides in Tokyo Bay by drowning himself, the letter he leaved was expected by two opposite ways—support the Chinese students' democracy in Japan or protest them.

はじめに

本稿の目的は、清末留学生である陳天華（1875–1905）の短い生涯を整理し、日中両国の今までの研究を分析することによって、近代在日中国人

キーワード：nationalism, foreign student, modern history, East Asia

留学生のナショナリズムの成立を探ることである。

本稿は、東アジアにおける「華夷秩序」から「国民国家」への転換を説明する研究の一環としての試みである。『自由書』を書いた梁啓超や「同盟会」を創立した孫文が日本において実践的に研究・革命活動を行ったように、中国知識人にとって明治日本は西洋化するための学術的かつ実践的な媒介である。最も早く近代化の改革を実現し、その成果を隣国に慕われている日本は、近代中国知識人に如何なる影響を及ぼしたのか。本稿を通じてその答えの一斑を伺うことができることに期待している。

1. 背景

日清戦争で敗戦を経験した清国にとって東にある日本の存在感はいよいよ強くなり、日本を経由して西洋文明を学ぶというルートで清国政府側が考案した。日本からの提議に応じ、初めて留学生の派遣を実現させた清王朝の重臣である張之洞は『勸学篇』において、留学先を日本に選んだ理由をこのように考えている。

（現代文訳）日本は小さな国に過ぎなかったが、なぜ突然強くなったのだろうか。伊藤、山県、榎本、陸奥のような人間は、二十年前皆西洋の留学生であった。彼らは国が西洋に脅かされることに憤り、自分の生徒百人余りを率いて西洋諸国を遊学し、帰国後重職に任された。これによって、日本は政事一変し、我が国の東方で崛起した。（中略）中国はロシア、日本、タイのような国に匹敵しないのか。

遊学先の選択は、西洋より東洋のほうがいい。その理由として一つは、費用が安く、学生を多く派遣できること。二つは、中国から近く、交通便利であること。三つは、言語は近く、習得しやすいこと。四つは、中国との情勢風俗が近く、日本人が精練した西洋制度を模倣しやすいことであ

る¹⁾。

この部分で分かるように『勸学篇』において権力者側にいる張之洞にとって、日本はあくまで西洋技術を習得するための便宜の媒介であり、西洋化に成功を収めた一サンプルに過ぎなかった。また、実際に日本語を上達し日本文化に関心を持つ清国留学生は九牛の一毛であり、清国留学生を引き受けるために成立された亦楽書院（後に弘文学院、宏文学院に改名）では通訳を用い半年ぐらいの短時間で西洋学術に馴染む速成科と、2年以上を経て本格的に日本語及び英語まで習得する普通科を併設された。後に速成科が学生に圧倒的な支持を受け、徐々に教育中心になったという²⁾。

2. 陳天華の生涯

1875年は光緒帝が即位した年である。李鴻章が「輪船招商局」を上海で創立して3年目、洋務運動は始まったばかりである。太平天国の乱が平定されてから11年も経っている。35年前のアヘン戦争は清国に驚くほど変化をさせたのである。陳天華はこの年に湖南省の新化県にある貧乏な家で生まれた。幼い彼は伝記や小説を愛読し、地元の民謡や芝居も好きだったという。（元名は陳顯宿。字は星台、過庭。別号は思黄³⁾）

1896年、日清戦争で清国が敗戦した2年後、24歳の陳天華は一族の人から資金を得て、新化県城にある資江書院で学び、2年後、維新派が提唱した新学を標榜していた「求实学堂」へ進学した。

1903年初、戊戌の変法が失敗した5年後、学績優秀な陳天華は湖南省師範館に招かれ、さらに前述した湖広総督張之洞が主催した日本留学に推薦された。（その年湖南省が派遣した留学生の数は官費31名、私費19名）入学先である弘文学院で同じ湖南省出身の黄興（のち中華民国大元帥、南京臨時政府陸軍総長など就任）、楊度（学者）、楊毓麟（革命家、のちに渡英）、

蔡鍔（のちに中華民国雲南都督，護国戦争に参加）などと親しみ，革命運動に飛び込んだ。

留学直後の同年4月，ロシアの満州侵攻に憤り，在日中国人留学生たちは「拒俄義勇隊」を集結し，本格的にロシアと戦おうとしているという。陳天華もその一員になった。清国の要請により日本政府は直ちにこの組織を解散させたが，のちに義勇隊はさらなる革命的な「軍国民教育会」に改組された。

一ヶ月後，彼の投書「敬告湖南人」が『蘇報』（上海で発行する有名な革命宣伝紙）に掲載された。これは革命の宣伝者としての彼の初めての声だった。（そのあと，革命宣伝の冊子「猛回頭」，「警世鐘」二部が夏，秋において順次出版された。）

年末，陳天華は黄興とともに帰国し，華興会を結成した。鄒容の「革命軍」と陳天華の「猛回頭」が4千冊ほど持ち帰られ，革命宣伝として使われたという。

1904年秋，内通者の告発により長沙起義が失敗し，陳天華は結局日本へ亡命した。

1905年1月，陳天華は「要求救亡意見書」を作成し，再び帰国して朝廷へ献書しようとしたが，留学生の会合に反対され，学生内部への配布も警察により禁止された。

同年7月，陳天華一同は孫文，宮崎滔天と面会した。翌月，「中国同盟会」が成立され，陳天華は書記（秘書）だった。彼は会約の起草人の1人であり，機関紙『民報』が創刊後の執筆者でもあった（実は，11月に出た「民報」創刊号において掲載された文章17篇の中，7篇は彼の文書だった。）

同年11月，日本の文部省は「清国人を入学せしむる公私立学校に関する規程」（いわゆる「清国留学生取締規則」）を發布する。留学生は激しく反対を起こした。国へ帰るべきかどうかについて，留学生内部でも論争が起

こった。12月8日、陳天華は遺書を残して、大森海岸で入水自殺した。

1903年の初日本留学から1905年の入水まで3年間をかけて、清国内の制限を逸脱した陳天華は「救国」を中心に創作した。主な作品は時間順で分けると以下のようなものである。

1903年5月「敬告湖南人」

1903年夏「猛回頭」（突然振り返る）

1903年秋「警世鐘」

1904年冬——1905年11月「獅子吼」

1905年1月「要求救亡意見書」

1905年8月「紀東京留学生歡迎孫君逸仙事」（今日留学生が孫逸仙君を歓迎する事を紀す）

1905年10月「中国革命史論」，「論中国宜改創民主政体」⁴⁾

陳天華に関する研究は大きく2つの視点に分けられる。一つは彼の作品である『猛回頭』と『警世鐘』などの文献分析、もう一つは彼の人生、特に自殺のような行動をめぐる調査（あるいは比較）である。例えば、武藤明子（1966）は陳天華ともう一人の留学生楊毓麟との履歴を比較し、陳天華は「国民」（漢民族）内部の矛盾に敏感であって不信感を持っているというような限界性を指摘した。また、上野昂志（1976）のように、陳天華の死を魯迅の「幻燈事件」を対照し、留学生の「屈辱感」に目を向けたものもある。以下は各先行研究を整理し、中心となった問題点を取り上げる。

3. 陳天華の思想と転回

陳天華の思想は長沙起義失敗による日本への逃亡を境目として、大きい変化がある。ここで、里井彦七郎（1958）の論文に拠りながら陳天華の思

想とその変化を説明する。里井氏によれば、陳天華の思想は主に3つの段階に分けられる。第一段階は留学以前、つまり「変法派」が提唱した新学を勉強した時である。第二段階は留学当初から長沙起義を図るため帰国するまでである。清国内の束縛から解放され、排外かつ排満の統一的革命思想を陳天華はこの時において高唱した「排満復讐論者」だと氏は論じている。第三段階は起義失敗によって、陳天華は一時的に混迷に落ち込み、清国政府に改革を求めた「要求救亡意見書」を書きあげた時期から、大森海岸に投身自殺するまでである。この時期を里井氏は「民主・共和革命論者」と呼んでいる。

第一段階における彼の思想について陳天華は何も残っていないが、留学直後数ヶ月から拒露義勇隊に参加したことによって推測できるだろう。

第二段階において、後に長沙起義に参加し、西太后の誕生日を機に集まった清国官員に爆弾攻撃を考えたほど、彼は中国・漢民族の危機と革命の必要性を強烈に感じた。

例えば、『敬告湖南人』は陳天華のデビューで、列強対抗及び愛国心の喚起を旨とした同郷への公開状である。この文は革命宣伝紙として上海租界で発行された「蘇報」に掲載された。文の中ではこのように書いている。

「民族帝国主義は漸く広がり、初めて我々奴隷と為し、続いて我々は牛馬と為し、終に草芥と等しくなる。(中略)今日の欧米列強は、内なる者に対して文明的な対応で接し、外なる者に対して野蛮な対応で接す。例えば英国人は最も自由平等を言う者だが、インド人は英国の民と相当な地位を得るに能わない」。

日本留学してわずか数ヶ月の陳天華はすでに西洋文明の両義性（ダブルスタンダードか）を把握している。一方で西洋国民の間では「自由平等」の諸権利を提唱する。しかしもう一方で西洋以外の国に対して、彼らは蔑視し暴虐な振舞いで侵略する。先進的な西洋学を勉強しながら、西洋文明

の侵略に抗う。この分析は必ずしも陳天華が日本に留学してから目覚めたわけではないが、逆に考えると、なぜ陳天華は長く続けた「無口」から「全湖南人に告げる」まで極端的に転回し、強烈な西洋批判と危機喚起を実行しただろう。恐らく彼は他の在日人留学生と同じように、顔がよく似ていて文字も近い「黄色人種」の国において、近代文明のこの両義性を体験したからである。

一方で日本国内の情勢と無意識に比較したかもしれないが、陳天華は清国内における手国主義支配の構造を理解している。「今日」の列強支配は「過去」の帝王更迭とは全然違うと、『猛回頭』ではこれらの「民族帝国主義」勢力は、「まず通商の名を借りて、国の関税を掌握し、あるいは返済しきれない貸金を提供し、あるいは鉄道を作って全国の要地を制し、あるいは鉱産を独占する。（国の経済が次第に窮迫し、国は自然に滅び去れば）西洋人はその国の人に政事、法律、軍事を学ぶことを禁じ、さらにひどくは国人を殺し合わせることもある。」とのように述べている。清国政府は「野蛮排外」から「媚外」（西洋諸国にこびること）に転換し、中国の「主人の主人」は英仏米のような「民族帝国主義」であり、「満州政府」と官僚はその帝国主義の下僕、さらに漢人と一般庶民は「奴隸の奴隸」である。

やや浅いが、陳天華は中国「植民地化」の過程と目前にある清国の「半封建半植民地」の現状を指摘した。侵略はまず不平等の貿易から始まり、それから産業開発に伴う原料の独占、軍事的脅迫によって沿海領土を侵害し、次第に「操り人形」のような支配人を設置し、資源を略奪して工業品を廉売する。清国政府は正にこの傀儡政権である。

陳天華は典型的な「排満主義者」である。「満州はもともと外国の鞭子（鞭韁の蔑称）、中国を盗み占め、無数の中国の人を殺し、我が祖宗の大仇である。」と彼は「警世鐘」の中に書いていて、かつて清初期の揚州と嘉定の虐殺の惨状を民衆に喚起し、文天祥、史可法のような「（漢）民族の

英雄」の「節」が「萬古流芳」だと謳歌している、
もう一方、思想面では彼が決定的な対立を求めている「旧思想」は儒教の全面的な否定ではなく、一般知識人にとって普遍的な「官僚になるために勉強する出世観念」と「忠君思想」である。『獅子吼』において、彼は孟子の「民を貴しと為し、社稷之に次ぐ。君を輕しと為す。」を引用し、まして清国政府は満州という「異民族」で、打倒すべしと述べている。では、その「旧思想」に対する「新思想」とは何か。『獅子吼』の中に、「二百年前のフランス民衆は暴政の下に敢えて反抗しなかったが、ルソーの『民約論』を引き受け、数十年の闘争を経て、公選による大統領制や議会制が実現し、共和政府によって、弊政一掃され、フランス人は自由の幸福を手に入れた。」と書いている。ルソーの『社会契約論』を彼のような留学生はどれほど理解しただろうか。少なくとも、このような啓蒙思想の書物を「未開国」の留学生の手がたやすく届ける環境を作ったのは「文明開化」を意識に刻んだ日本である。しかし、彼にとって革命の実践である長沙起義の挫折及び日本における革命運動の弾圧により、彼は混迷に落ちたあげく、改革を清国政府に頼ろうとする「要求救亡意見書」を書き、全留学生の名をもって、上京しようとした。(留学生から強烈に反対し阻止された。)「意見書」の全文は孔祥吉と村田雄二郎の共著論文(2005)に記されている。「意見書」中に陳天華は革命派の弱さを自省し、「中国は瓜分の危機に臨み」(日露戦争を指す)、革命が迅速に実現できず、したがって直ちに清国政府に救亡を要求すべきと述べた。第二段階のような排満かつ反専制思想から現実への妥協という変化は孔・村田両氏は梁啓超からの影響だと判断した。この「瓜分の危機感」が後退の要因として働いていた陳天華を励んだのは、孫文が「同盟会」を集結する際の演説である。演説では孫文は日本の明治維新を評価し、維新志士のような国に対する責任感を喚起しようとした。中国は後進国であり、先進国の経験を習い、多く失敗を避ける

ので、明治維新より迅速に文明化できるし、また、中国の人口が多く、歴史、文明も古くて、優れた素質を持っているので、同志の協力をもって必ず日本や欧米より強い民主国家を作れる、というような発言は、陳天華をはじめ、足を置く場所もない会場にいる留学生たちに大きな拍手を得た。その後、彼はあらためて筆をもつようになり、自由民主を中心に創作し始めたが、しかしただ4ヶ月を経て、彼は大森海岸から一步一步で海の中まで歩いていった。このように、陳天華の思想は「排滿」、「反列強」、「求新」から最大限の団結を求めるために、「政府との妥協」に変化し、孫文からの影響を受けたやいなや、彼の自殺により留まれた。

4. 入水の経緯と「絶命書」

1905年秋、日本政府が清国政府から要請を受け、「清国留学生取締規則」を考案し発布した。留学生はその規則に「自主性の妨害」と「輕蔑」を感じ、激しい反対運動及び帰国に関する論争が起こされた。さらに朝日新聞をはじめ日本新聞紙はこの運動に対して「放縱卑劣」だと愚弄した。陳天華は留学生内部の分裂による失望および日本の新聞からの屈辱感に耐えずに自殺した、というのは通説だった。

「清国留学生取締規則」は「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規程」の通称である。林増平（1991）によると、この規則が正式に発布する前に、すでに「清韓留学生取締規則」が配布されるという報道が新聞に掲載され、留学生の考えでは「日本の保護国である韓国と同等とされ」る侮辱であった。11月2日実際に「規則」公表され、「取締」というのは石油や銃砲のような物に対する用語で、妨害のない留学生に対して使うのは差別である」という。憤った学生は駐日公使の手で、第九条及び第十条の削除を要請した。二カ条は以下のように書いている。

第九条は、「選定を受けたる公立又は私立の学校に於ては清国人生徒を

して寄宿舎又は学校の監督に属する下宿等に寄泊せしめ校外の取締をなすべし」

第十条は、「選定を受けたる公立又は私立の学校は他の学校に於て性行不良なるが為退学を命ぜられたる清国人を入学せしむることを得ず」

公式上書において、留学生は通学や経済と日中の風習の違いなどの理由で第九条に、「性行不良」という言葉は幅広くて管理者に悪用される恐れがあると第十条に反対したが、裏では「居住地を定めるとは娼婦と同視されること」、「性行不良の判定は革命活動者を干渉し压制すること」など過激な解釈も存在する。

その後、12月初この二カ条に対する反対運動が拡大し、路鉉学堂の学生は『『規則』が中国国体を辱め、全部を取消すべき』を載った印刷物を配布した。次第に宏文学院をはじめ各留学生学校の生徒は授業を拒否した。

3日、学生内部は二派に分け、一部の学生は「平和的な手段」で事件解決を図っていたが、秋瑾が代表とした抵抗派はこれに対して批判した。

6日から、各学校門の前に刃物と銃を持ち、ほかの学生の授業参加を阻止した「糾察員」が現れた。

8日、陳天華の投身自殺によって、『『規則』反対運動』はさらに激化された。

李喜所と李来容（2009）はこの「運動」に以下のような問題点を指摘している。

一つは日本政府が清国政府から要請に容易に受けるはずがないこと。留学生の管理は日本の内政であり、清国政府により日本政府が留学生の活動及び言論を厳しく圧迫することは考え難い。例えば張之洞が提案した留学生の監視及び管理を旨とする「約束游学生章程」は日本側が拒否した。

二つは留学生が「規則」を誤読した可能性。一方、「取締」という言葉

は日本語において「管理する」の意味であり、確かに「やや厳しい」だが、現代中国語では「禁止する」というより深刻な意味である。日本語が上達しない当時の留学生にとっては、「誤解しやすい」と両氏は指摘している。論争が行われた後、文部書はすぐ「規則」に対して、柔軟な「説明文」を出した。したがって日本政府は当時の中国人留学生に悪意がないと判断した。

「規則反対運動」の責任者はいずれにせよ、陳天華の死とこの『取締規則』の配布との関係がないことは、陳天華の遺書を再読すれば明白になる。遺書において陳天華は以下のような態度が示されている。

一つは「規則」が確かに「我々の自由を奪い」、「我々の主権を侵害」したが、学生たちの授業拒否については、「事態は愈々重大になる恐れがある」ため、賛成しない。

二つは反対運動が今までのように行われた以上、留学生全体は一致し長久に貫くべき。

三つは我々留学生は「放縦卑劣」な行動をし、日本人の口実になってはならない。

四つは私は「放縦卑劣」この四字に痛感し、その反対語である「堅忍奉公、力学愛国」（自分の理念を貫き民衆に貢献すること、勉強に努力し国を愛すること）皆に伝えて忘れられないように私は海に身を投じた。留学生の皆さんは今の事態を拡大しないでほしい。

自分の死は日本の新聞の中の「放縦卑劣」という嘲笑に対する反発でも「規則反対」のためでもなく、我々留学生たちが勤勉や愛国精神を貫くように励むためである、と彼は考えていた。世の中では若いうちに絶望して

自殺した人が今でも少なくないと思われる。どこかを行き詰まって、人生を終える人は「激情的な臆病者」だと名付ければ、自分の死をもって生者と未来へ何かメッセージを残そうとする人はどう命名すればいいだろうか。前者は死ぬ寸前必ず後悔し、後者はより「冷静的に」死を迎えると私は思う。

終わりに

日本は中国人留学生たちのナショナリズムの養成所である。清国内の制限から逃げた知識人に西洋文明を体験させ、「先進的な西洋思想」を勉強させ、また「屈辱感」のような刺激を含め、彼らの「民族」「政治」思想の形成を促した。陳天華のような中国人留学生は日本を基盤とし、中国と日本友人同志と交じり合い、革命運動を実践した。そういう意味で、日本は中国人留学生たちが西洋と交戦する前線でもある。一方、孫文が主導する「同盟会」の入会宣誓詞の中には「鞭撻を駆除し、中華を回復し、民国を建立し、地権を平均とす」というような民主国家の創立を誓いながら、強烈な排満意識を持っている。この意識は20年後「五族共和」までにまだ残留している。それに対して、強烈な危機感に目覚め、「排満」から脱皮し、革命が実る際に自分の理念を同胞に告げるために献身した陳天華は大勢の留学生の中の1人に過ぎないが、彼の思想と行動を後の孫文と参照してみると先進的だったかもしれない。

以上のように在日中国留学生のナショナリズム覚醒は迅速的で過激だと思われる。彼らはある種の独特な責任感とやや神経質なプライドを持っている。「中国人留学生」という集団は今まで百数十年も続けてきたが、このようないわゆる「愛国心」は彼たちの頭の中に変容されたのか。また、そもそも彼が殺到する前に、日本においてどんなことがあってから、周りの国の目標となったのか。今後のテーマとして深めたいと思う。

注

- 1) 張之洞『勸学篇 外篇 遊学第二』1898年初版
- 2) 潘世聖 第322回日文研フォーラム「嘉納治五郎と近代中国—時代を超えた知性と智慧」による
- 3) 以下の履歴は主に「陳天華集」,「辛亥革命の思想」,「日本留学精神史」により作成された。詳しくは本文の参考文献に記す
- 4) 以上の文献は1958年出版した「陳天華集」に収録された。詳しくは後の参考文献を参照

参考文献

著書

- 嚴安生『日本留学精神史』, 岩波書店, 1991年
島田虔次, 小野信爾[編]『辛亥革命の思想』, 筑摩書房, 1968年
小島祐馬『中国の革命思想』筑摩書房, 1967年

論文

- 阿部賢一「陳天華論-1-陳天華思想の起点」,『政治経済史学』(通号210), 政治経済史学学, 1984年1月
大塚博久「自尽の思想-1-陳天華の場合」,『山口大学教育学部研究論叢 第1部 人文科学・社会科学』, 山口大学教育学部図書委員会[編](通号 27), 1977年12月
上野昂志「鲁迅との隔たり——鲁迅と陳天華」,『新日本文学』31(3), 新日本文学会, 1976年3月
小倉芳彦「<資料>陳天華『中国革命史論』」,『学習院史学』(6), 学習院大学史学会, 1969年12月
中村哲夫「陳天華の革命論の展開」,『待兼山論叢』(通号2), 大阪大学大学院文学研究科, 1986年12月
武藤明子「陳天華と楊毓麟」,『寧楽史苑』(14), 奈良女子大学史学会, 1966年
里井彦七郎「陳天華の政治思想:<洋人も人なり。吾も亦人なり。>」,『東洋史研究』, 東洋史研究会, 12巻3号, 1958年

中国著書

陳天華〔著〕劉晴波・彭国興〔編校〕『陳天華集』，湖南人民出版社，1958年

中国論文

林增平「清末留日中国学生反“取缔规则”斗争」，『湖南师范大学社会科学学报』，湖南师范大学，1991年1月，20卷第1期

孔祥吉 村田雄二郎「陈天华若干重要事实补充订正——以日本外务省档案为中心」，『福建论坛·人文社会科学版』，福建社会科学院，2005年第4期

李喜所 李来容「清末留日学生“取缔规则”在解读」，『近代史研究』，中国社会科学院近代史研究所，2009年第6期

陈战峰「清末皇帝形象和文化的内涵与价值」，『长安大学学报（社会科学版）』，长安大学，2016年7月第18卷 第3期